

## 日本洋書協会会報

BULLETIN OF JAPAN ASSOCIATION  
OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

## 目次

|                            |     |
|----------------------------|-----|
| ●理事会報告／70周年記念事業について        | 1   |
| ●フランクフルト・ブックフェア 2010       | 2-3 |
| ●印刷博物館見学会報告                | 4   |
| ●関西懇親パーティー 2010／第9回ポーリング大会 | 5   |
| ●アイラ島の嵐（前編）                | 6   |

## 理事会

## 理事会報告 2010年10月18日（月）

## 1. 会計報告

事務局より上半期の予算遂行状況の説明があった。大凡予算通りで承認された。

2. 創立70周年記念事業への取り組み  
別掲

## 3. 秋のセミナー

・印刷博物館見学会は9月22日（水）に11名の参加で行われた。

## 4. 関西パーティー

・9月17日（金）大阪第一ホテルに12社、30名を集めて行われた。

## 5. 理事長から

・新年賀詞交歓会にはOBを含め盛大に行いたい。

## 70周年記念事業について

総務委員会からの提言に基づいて次の通り審議した。

## 1. 記念事業を遂行するための人員構成（実行委員会を組織する）

## ①理事長

## ②理事会

以下、「実行委員会」

## ③担当理事（1名）は鶴理事に決定

## ④総務委員会＋必要に応じて各委員会・個人が協力

## 2. 開催候補日

第一候補：2011年7月15日（金）

第二候補：2011年7月22日（金）

## 3. 予算

①出席する会員からはサマーパーティー程度の会費を徴収し、記念事業としての予算は特別会計を取り崩すこととする。但し、取り崩す金額については事業計画の規模、内容をみながら決めることと

する（現時点での特別会計は凡そ¥6,700千円）

## 4. 事業開催要項（飽くまでも案であり、詳細は今後詰めることとする）

①サマーパーティーと同時に開催（懇親会費を徴収し、不足分、記念品等は特別予算）

②関西の会員を招き、その年の関西懇親会は行わない

③永年理事、功労者に感謝状

④会場は都内の交通至便なホテルから選定し早急に仮予約する

## 5. その他の意見

①会員を中心に案内し、協会が70周年を迎えたことを祝賀（慰労）する会にしたい

②人数は250人前後を目途とする

\*以上を基本概念とし、以降実行委員会にて詳細をつめることとした。

# フランクフルト・ブックフェア 2010

展示ブースに向かう初日には、巨大な会場の建物を目の当たりにすると、今年も新たな情感と期待感が湧き上がり、時差でけだるい体に活力を与える。今年も、多くの参加者と新たなコンテンツがそろえば、それなりに新しいビジネスのドラマが展開する。

われわれの活動分野である医学系出展は、主に Hall 4.2 (通称 STM & Academic Publishing Hall) と、米国・英国の出版社、医科協会などが出展している Hall 8.0 が中心である。この両館は室内通路でつながっているものの、徒歩で5分ほど離れている。そのほかに Film & Media を展示した Forum 館、Fiction、Non-Fiction、Children's Book などをはじめ世界のさまざまな出版物が Hall 3.0 から Hall 8.0 に展示されている。まさにもっとも歴史のある、世界一のブックフェアといえる。館外の敷地には、各ホールを移動するためのマイクロバスが順次運行していて、参加者に有効に使われている。従って、移動のロスをなくすために、多くのアポをホール別にいくかに効率よく集中してとれるかが、事前の重要課題の一つとなる。幸いに、今回もある程度まとまってアポがとれたので、比較的効率よく周ることができそうではまずは一安心である。

ちなみにわれわれの主な交渉内容は、医学・薬学・看護書籍の版權取引と、洋書籍・洋雑誌・デジタル情報の輸入、そしてそれにつながるファーマビジネスと多彩であり、主要な水・木・金曜日の3日間はほぼアポで埋まっている。かろうじて30分設けた昼食は、アポにずれがなく運がよければ、ホールのバーで簡単にとることができるのだが、それもあまり期待はできない。いずれにせよ今年も舞台は整ったようで、いざ出陣である！

Hall 4.2 (第4館の2階フロア) は、いつものとおり男女ともフォーマルに近い服装を着用し、学術的な色が濃く独特の雰囲気醸し出している。当然、一般客は少ない。それに比べ、一般書の展示ホール (Hall 3.0 ~ 8.0) や地元のドイツ書の展示ホール (Hall 3.0、3.1、4.1) は、一般客もかなり多く、東京国際ブックフェアのように常に賑やかで盛況にみえる。また、日本の総合出版社が集合している Hall 6.0 については、相変わらず日本のマンガを中心とした各国のそれに携わるエージェントの版權交渉で、絶えず人だかりである。このように、それぞ

れの分野で特徴を活かした出展模様の中で、トレーダーおよび一般参加者が入り混じり、各ホールで多くのイベントや交渉が行われている。

近年、特に米国市場でオンラインジャーナルを中心としたコンテンツが急激に市場を伸ばし拡大しているわけだが、今回、Hall 4.2 で主に気がついたことは、これらのオンライン・データベースのプラットフォーム提供会社やそれに関わるウェブ構築関連企業が多くなってきていることである。特に、米国はもちろん、インドの躍進は非常に目に付いた。そのほかには、医学情報も iPhone、iPad、Kindle などのデバイスからの提供が徐々に目立って増えてきたことである。来年初旬には、iPad よりもコンパクトな製品が BlackBerry より発売されるようで、こちらの競争にもさらに拍車がかかりそうだ。このような現実を目の当たりにすると、日本の自然科学書業界も書籍や雑誌のデジタルオンライン化がまもなく進むと感じざるを得ない。ちなみに、このホールでの日本からの出展社は、販売で丸善、紀伊國屋、版元では医学書院、培風館、南江堂が常連となっている。

一日のアポが終わり、夕方からといえば、主要な取引先を招待した夕食会や他社主催のパーティーの出席など、連日連夜の付き合いがある。大手学術系出版社のパーティーは、以前よりも地味傾向にあるが、各ブースでワインパーティーを催すのは常である。したがって、お



のずと同日に何件かを掛け持ちすることはよくあり、確かに体力勝負といえなくもない。

主催者によると、今年は111ヵ国以上から、7,539の出展社が集い、期間中の入場者数は合計279,325人で、約3,000のイベントが期間中に催されたとのことである。参加人数的には、昨年、一昨年よりもさらに減少傾向にあるが、これも昨今の経済不況が原因と思われる。また今年から、会場内で無線LANが無料提供され、昨年まで有料であったメール等の連絡がしやすくなったこと、またフェア入場券で昨年よりも1日早く電車や地下鉄が使えることなどが便利にはなった。

今年の招待国はアルゼンチンであった。スケジュールの都合上、残念ながらそのイベントには参加できなかったが、それぞれ趣向を凝らした催し物があったと聞いている。また、最近2度ほど招待国となった中国の躍進ぶりが特に目を引いた。Hall 6.0には日本・中国などのアジアを中心とした展示ブースがあるのだが、中国の展示規模は日本の出展数の数倍もあり凄まじいものがあった。現在の高度成長を、まさに如実に表しているといえよう。中国の出版における著作権問題等については、かなり改善されているとは聞いているが、このような取り組みをさらに続けていくことによって、発展国レベルになることをさらに期待してやまない。

最後に、毎年参加して思うことは、自分を取り巻く自然科学書業界が、今後どのような方向に行くのか？ 将来の適切な出版情報の伝達は、いかなるものか？ 今後求められる学術情報は、どのようなものか？ など、常に考えさせられるイベントだということである。

(株南江堂 青柳三樹男)

-----  
今年も世界最大の本の見本市、フランクフルト国際ブックフェアが10月6日～10月10日の5日間に渡り開催されました。開催前は今年の主賓国（アルゼンチン）の出版業界の規模（昨年の中国と比較した際）や欧州全体の経済状況が未だ回復しきっていない点なども受け出展社数は6930社程度との報道がでていましたが、今年の4月に開催されたロンドンブックフェアがアイスランド火山の噴火のために多くの業者が出席できなかった影響もあったのか、ふたを開けてみれば今年の出展社数は昨年と同等の7,539社だったとのプレスリリースが出ておりました。駆け込みで増えたにしておいささか多いような気もしますが、業界全体として変わらない盛り上がりを見せたのは喜ばしいことでもあります。但し、一般公開



となった週末の来場者数は若干の落ち込みをみせたようで、全体の来場者数は昨年の290,469人から3.9%減の279,325人となったとのことでした。

私自身9月付で弊社ロンドン事務所に赴任した直後だったこともあり、フランクフルトでは自己紹介を含めた各出版社との面談の嵐。フェア会場をゆっくりと見て回って業界全体の傾向を探るという所まで手（というか足）が回りませんでしたが、フェアと一緒に出席した同僚・上司の話、会期中に行った出版社との面談、そして最終日である日曜午前中の限られた時間で見て回った印象を総合すると、全体的には電子ブックや各種端末機を本格的にビジネスとして戦略に組み込み始めた企業が増えてきたという雰囲気が感じ取れました。

2007年から市場をにぎわせてきたAmazonのKindleを始め、昨年から今年の前半にかけて相次いで市場に投入されたiPad、Nook、eReaderなどの電子書籍リーダーは、低迷する書籍業界にある種熱狂的ともいえる話題を提供し続けており、今回のブックフェアにおいてもそれらのスタンドは盛況ではありましたが、流行りに乗り遅れまいという雰囲気は薄れて、世界を相手にしたビジネスとして根付かせるために各業者が必死に各国の調査を行っている姿も目立ちました。

電子書籍以外においても、ドイツを初めとした各国の出版社の中には大量に本を印刷して在庫を抱えるスタイルから、一定部数の初版がなくなった後はプリントオンデマンドで対応する、もしくは最初からプリントオンデマンドでしか対応しないという方式を取り入れる所も出てきており、今後は日本における洋書の流通や販売方法にも変化が必要になってくるかもしれません。

近年慌ただしく変化を続ける本業界だけに来年のフランクフルトでもまた新しい発見を期待したいところですが、まずは来年のロンドンブックフェアが無事開催されることを切に願う次第です。

(丸善株ロンドン事務所 坂本健伍)

# 印刷博物館見学会報告

見学日時：2010年9月22日（火）

## 1、はじめに

9月下旬というのに夏のような暑さの日、参加者11名で印刷博物館見学会が行われました。本見学会の様子は、(株)カラーフィールドに今年の4月から入社した企画・営業担当、長谷川希がご報告致します。

まずは印刷博物館について簡単にご説明します。印刷博物館は、2000年に凸版印刷が100周年記念事業の一環で設立した「印刷文化」の分野において日本最大の博物館です。また、印刷文化の資料収集・研究だけでなく、活版印刷等を体験できる貴重な施設でもあります。本見学会は印刷博物館の方に解説をして頂きました。

## 2、プロログ展示ゾーン

まずは印刷の世界へと導く空間、「感じる」をテーマにしたプロログ展示ゾーンを見学しました。縦2m×横14mの大きな壁面には印刷史に関連する約100点のレプリカが展示されています。ラスコーの洞窟壁画から始まり、聖書、百万塔陀羅尼、浮世絵等、西・東洋問わず印刷史全体を知る事ができます。

## 3、印刷の家

その後、印刷を体験できる工房「印刷の家」を見学しました。工房のガラス越しには大きな印刷機、活字等、活版印刷に必要な物たちが見え、外からも印刷している様子が見学できます。

### ①アダナ印刷機

まずは、手軽に印刷できる事から日本でも愛好家が多い、イギリス製のアダナ印刷機による小さなカードへの印刷体験を一人ずつ行ないました。この印刷機の使用は初めてという方が殆どでしたが、皆さん綺麗に印刷されていました。

### ②活字

次は少し傾斜のかかった棚に入った、大小様々な活字を見学しました。特にルビの活字はとても小さく、指の細い女性や子供が活字を拾う事が多かったそうです。

文字の並び順は部首別である事、使用頻度の高い活字はよく出張に行くことから大出張と称されている事、文選は2000字を約1時間（1文字3秒）で文選

箱に拾う事等も教えて頂きました。

### ③コロンビアン印刷機

次は手引き印刷機、アメリカ製の黒いコロンビアン印刷機を体験。圧盤の上部には金色の大きな鷲がいます。とても装飾的な印刷機ですが、鷲は装飾と同時におもりの役割も果たしているそうです。

これは一名だけ体験できるため、私が体験致しました。レバーを引くにはとても力が必要で、少し掌が痺れてしまい、印刷は力が必要な作業のため、男性が行っていたというのも納得です。

## 4、企画展示ゾーン、総合展示ゾーン

印刷の家を体験した後は自由行動。企画展示ゾーンと総合展示ゾーンを見学しました。

前者は「会館10周年企画展 印刷博物館10年のあゆみ」と題し、これまでの企画展のダイジェスト版、後者は「わかる（理解）」がテーマであり、ガラスケースの中には貴重な所蔵品レプリカが展示されていました。展示台には小さなモニターがあるため、解説をじっくりと聞く事もできる勉強になる展示方法でした。

## 5、終わりに

貴重な体験をして貴重な資料を見ることができ、とても勉強になった見学会でした。参加した皆様も同じ感想をお持ちになったのではないのでしょうか。印刷博物館の方へ感謝申し上げますと共に、今後も勉強になる見学会を楽しみにしております。

（(株)カラーフィールド 長谷川 希）



## 関西懇親パーティー 2010

去る9月17日（金）、大阪マルビル 大阪第一ホテルおきまして、JAIP レクリエーション委員会主催の「関西懇親パーティー」を開催いたしました。今回で6回目となり、何とか定着してきた感があります。

今年の懇親パーティーは、レクリエーション委員会の鶴委員の進行により、山川理事長の挨拶に続き、副理事長・丸善(株)の土方常務に乾杯の音頭をお願いし、懇談・情報交換に入りました。今回は関西、関東地区から12社30名程の方に出席頂きました。初登場は神陵文庫本社から丸山、相川両氏で、洋書業界とは少し雰囲気の違いの医学書専門店のお話を皆興味深げに耳を傾けていました。

昨年に比べ出席人数は減りましたが、その分、全員

と名刺交換、情報交換が行われ、この方が良かったとの声に安堵しながらお開きとなりました。

(M.S.記)



## 第9回 ボウリング大会

2010年9月1日（水）

会 場：ロサボウル（池袋）

参加者：17名（7社） 男性12名 女性5名

競 技：3Gのトータルピン（女性は20ピン/ゲームのハンディキャップあり）

上位の成績は下記の通り

| 順位  | 氏名（社名）                 | 総得点 | 1G  | 2G  | 3G  |
|-----|------------------------|-----|-----|-----|-----|
| 優勝  | 山中 玄致（ユサコ）             | 494 | 119 | 218 | 157 |
| 2位  | マーク・グレシャム（UPS）         | 453 | 132 | 144 | 177 |
| 3位  | ハリデイ・ダーレン（マクミラン LH）    | 443 | 123 | 190 | 130 |
| 4位  | 植原 英男（日本出版貿易）          | 419 | 149 | 125 | 145 |
| 5位  | 平野 覚（ユサコ）              | 418 | 154 | 138 | 126 |
| 6位  | 寺尾 雅人（日本出版貿易）          | 381 | 116 | 137 | 128 |
| 7位  | 富田 斉秀（ケイラインロジスティクス）    | 361 | 91  | 141 | 129 |
| 8位  | 小向奈保子（絵本の家）            | 346 | 122 | 89  | 75  |
| 9位  | 長谷 明彦（ケイラインロジスティクス）    | 344 | 87  | 123 | 134 |
| 10位 | 鶴 竜次（東亜ブック）            | 339 | 98  | 121 | 120 |
|     | ハイスコアー男性／G 山中 玄致（ユサコ）  | 218 |     |     |     |
|     | ハイスコアー女性／G 小向奈保子（絵本の家） | 122 |     |     |     |



<優勝者のコメント>

毎回楽しく参加させて頂いております。

今回は1ゲーム目のスコアで全てが吹っ切れ、2ゲーム目でハイスコアを出すことができました。

この幸運は、JAIP 記念Tシャツを着用したお陰と思っています。会員の皆様との楽しい時間を過ごせるため、これからも参加させていただきます。 山中玄致（ユサコ）

次回は2010年11月30（火）に開催予定です

# アイラ島の嵐（前編）

2010年6月下旬、約2年ぶりにアイラ島の風に当たって来ました。2年前の旅行記は会報498号に「アイラ島の嵐」と題して掲載させていただきました（従って既出の原語は省略してあります）。前回は気楽な一人旅でしたが、今回は飲み仲間とせがまれ総勢8名のグループ旅行。俄か添乗員のようなもので、それだけに冷や汗たらたら、なかなか大変な旅行ではありました。

飲み仲間とは言え、とあるバーでの顔なじみという、それほど連帯感の強くない繋がり、顔なじみのそのまた友達もいましたので、出だしは何ともぎこちない旅でした。しかしそこはそれ一つテーブルで飲み出せばもう昔馴染みのようなもの。旅先での冷や汗は連帯感を高め、帰国後もバーで顔を合わせれば思い出話に花が咲くようにもなりました。以下にその顛末を記してみました。

モスクワ経由のアエロフロートはやはりくたびれます。ウォッカのサービスでもあれば何とかなのですが、有料のデンマーク・ビール、ツボルグ(Tuborg)で凌ぎながらの長旅は出来れば避けたいもの。ツボルグは美味しいです。航空券が安いのと機体がフランス製エア・バスというのがせめてもの救い。ロンドンのホテルに着いたのは夜の10時過ぎ。全員そのホテルに泊まれるのかと思いきや、2名は隣りのホテルに泊ま

れとの仰せ。事前のネット旅行会社とのやり取りでは分宿なしというところまで漕ぎ着けた筈がおかしいと抗議したところ、同じ経営のホテルだということで一蹴。どう見ても同じホテルとは思えません。何回も電話でやり取りをした旅行会社のKatalina嬢、出て来い。今回の一番の苦労は8名全員が同じホテルに予約を入れることの難しさでした。

翌朝、近くのユーストン駅から鉄道でグラスゴーへ。着後漱石ゆかりのピトロッホリーぶらり遠足をしてグラスゴーに戻り一泊。三日目は一番バスで出発したいところですが、ケナクレイグ港に着いても午前の便には到底間に合わない、グラスゴーで昼食後に出発するしかありません。途中3時間半のバス旅は、スコットランドでも景色のよいアーガイル地方を通って行きます。ここまでは何とか平穏な旅ではありました。

午後6時、ケナクレイグからのフェリーも順調に走り出し、船室でグラスゴーのビール、テネンツなんぞを傾けながらアイラ島到着に胸を躍らせていました。午後8時過ぎ甲板に出て、久しぶりのアイラ島の表玄関ポートエレンを拝もうと眼を凝らしておりました。しかし、どうも様子が違います。接岸してみると何と裏玄関のポートアスケイグ(Port Askaig)でした。ジュラ島がすぐ対岸に見えています。曜日によって到着港が異なるという認識を持っていなかった添乗員のせい

でした。添乗員さんどうしてくれるの、とは誰も言いませんでしたが、慌てて閉まりかかっている観光案内所に飛び込み、25キロ程離れたポートエレンのホテル迄のタクシー手配を頼みました。待つこと5分、ようやく運転手に繋がったようで命拾いをしました。聞いてみると、何でも島には6台しかタクシーがないそうで、この時間に呼びだすのは至難の業だということです。西の空に笑っているような太陽がまだ照り輝いていたのが心強い味方でした。これで真

っ暗だったら何としよう。



ポートアスケイグ

# JAPAN PUBLICATIONS TRADING Co., LTD 日本出版貿易株式会社

## VOGUE ITALY (ヴォーグ イタリア)



ファッション誌の女王「VOGUE」のイタリア版。総合的な内容のVOGUEアメリカ版に比べ、ファッションの比重が高いVOGUE ITALIA。常に芸術性の高い誌面が楽しめる。ミラノ・コレクション特集号など、企画ものの別冊も本体に引けを取らぬ充実ぶり。

(本体 ¥2,240.-/  
税込 ¥2,352.-)

## L'UOMO VOGUE (ル・ウオモ ヴォーグ)



人気のイタリア版Vogueの男性版。著名人へのインタビュー、ファッション、エンターテインメント、スポーツなど、ライフスタイル全般にわたる幅広い話題を取り上げた記事が中心である。デザイナー・ブランドに身を包んだ著名人のグラビアは、モデルにはない空気を醸し出していて、一見の価値あり。

(本体 ¥2,480.-/  
税込 ¥2,604.-)

## VOGUE GIOIELLO (ヴォーグ ジョイエル)



時計と高級ジュエリーに特化したVOGUE Italy。登場する写真の数々は、さすがVOGUEと言いたくなるほど美しく、高級感あふれる仕上がりとなっている。特に、新作ジュエリー紹介はフルページに1点という豪華さ。デザイナー、業界関係者向け。巻末に英語テキスト付

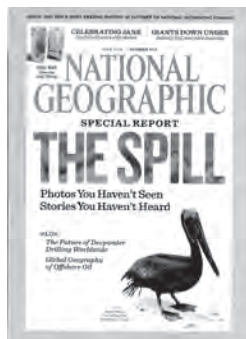
(本体 ¥3,120.-/  
税込 ¥3,276.-)

## VOGUE bambini (ヴォーグ バンビーニ)



子供のファッションに特化したVOGUE Italy。子供服とはいえファッション性を重視する姿勢は、さすがイタリアならではのもの。あどけない子供の笑顔と愛らしいファッション、ちょっとクールなファッションなどのグラビアは、見ているだけでもつい微笑んでしまう。イタリア語・英語併記

(本体 ¥2,380.-/  
税込 ¥2,499.-)



### "もっとも知られた月刊誌"

1888年に創刊された世界最大の非営利団体、ナショナル・ジオグラフィック協会が発行する会員誌。オールカラーの雑誌として知られ、〈地理知識の普及と向上〉を掲げる同協会のもと、地理、文化、自然、科学、技術と幅広い分野をカバーしている。月にはナショナル ジオグラフィックの旗がある。

(本体 ¥940.-/税込 ¥987.-)



### "もっとも影響力のあるメディア"

1922年9月、アメリカにて創刊された外交・国際政治専門誌。外交・国際政治関係の雑誌として最も権威があるとされており、その時代を代表する外交・国際政治や国際経済に関する論文が発表される場として度々選ばれるなど、世界的影響力をもつとされる。

(本体 ¥1,650.-/税込 ¥1,733.-)

JPTでは、アメリカ・フランス・イタリアを中心に約500タイトルの洋雑誌の取り扱いをいたしております。  
洋雑誌に関するお問い合わせは弊社洋書課雑誌係まで。

### 取扱出版社

ELT-----Cengage Learning, Pearson, Macmillan Languagehouse, Oxford UP, Cambridge UP  
On Japan-----タトル出版、講談社インター、JTB、JOIE、Japan Times、日貿出版  
日本語教材-----凡人社、ジャパントイムズ、講談社インター、スリーエーネットワーク、アスク  
PaperBacks-----RandomHouse, Simon&Schuster, Harper Collins, Penguin, Pan Macmillan

## 日本出版貿易株式会社



本 社 〒101-0064 東京都千代田区猿樂町1-2-1  
TEL:03-3292-3755 FAX:03-3292-8766  
URL: <http://www.jpco.co.jp>

国内営業一部:営業一課(書籍窓口) TEL:03-3292-3755

洋書課(雑誌窓口) TEL:03-3292-3767

大阪営業所 TEL:06-6886-7176

九州営業所 TEL:092-534-2270

::: 教育学の必須レファレンスが約15年ぶりに改版! :::



# 教育の国際百科事典

第3版 全8巻



## International Encyclopedia of Education

3rd edition

Edited by **Eva Baker**, Center for the Study of Evaluation, UCLA, USA  
**Barry McGaw**, Education Directorate, OECD, Paris, France and  
**Penelope Peterson**, School of Education and Social Policy, Northwestern University, USA

■ ■ ■

2010年5月刊行. 8,400 p., 8 Vols., Hard. ISBN 978-0-08-044893-0  
在庫特価 (在庫限り) USD4,285.00 / 通常価 ¥576,016 / 在庫特価 **¥472,500** [税込]  
(在庫なくなり次第) USD5,365.00 / 通常価 ¥721,197 / 特価 ¥552,918 [税込]

Elsevier, NLD / 日本総代理店: 丸善

- ☒ 教育学全般を扱った比類ない大型レファレンス
- ☒ 旧版 (第2版) から約15年ぶりの改訂に伴い、コンテンツは100%新しい内容へ刷新
- ☒ AERA/アメリカ教育学会の会長経験者であるPenelope PetersonとEva L. Baker, OECD  
教育部門の局長を務めるBarry McGawをチーフ・エディターに迎えた、信頼性の高い内容
- ☒ 100以上の国からのおおよそ1,500人の国際的に著名な専門家・研究者によって執筆された、  
グローバル時代の教育学事典
- ☒ 近年注目が高まっているトピックについても網羅しており、教育学における必携の書

### オンライン版のご案内 エルゼビア社のプラットフォームScienceDirect (SD) 上でご提供

- ◆ 買い取りモデルの場合、SDを未導入のお客様には、2年目以降別途アクセスフィーが発生します。
- ◆ 年間購読は1月-12月期間でのご契約となります。4月-3月期間でのご契約をご希望の場合はお問い合わせください。
- ◆ e-Bookの契約範囲は全学のみとなります。個人や学部等に切り分けてのご契約はできませんのでご注意ください。
- ◆ 価格は予告なく変更されることがあります。  
詳細はお問い合わせください。

#### ■ 買い取りモデル

指定代理店: 丸善

2010年11月中旬以降適用価格。2011年価格 / 税抜価格

|      | ユーザー数 (教員・学生数) |               |          |
|------|----------------|---------------|----------|
|      | 1~10,000       | 10,001~25,000 | 25,001~  |
| 通常価格 | ¥523,000       | ¥653,800      | ¥784,500 |

#### ■ 年間購読モデルもございます

上記の商品に関するお問い合わせは



**丸善株式会社** 教育・学術事業本部 学術情報ソリューション事業部 商品センター

〒140-0002 東京都品川区東品川14-13-14 グラスキューブ品川

TEL:03-6367-6079 FAX:03-6367-6184 e-mail: irneisui3@maruzen.co.jp